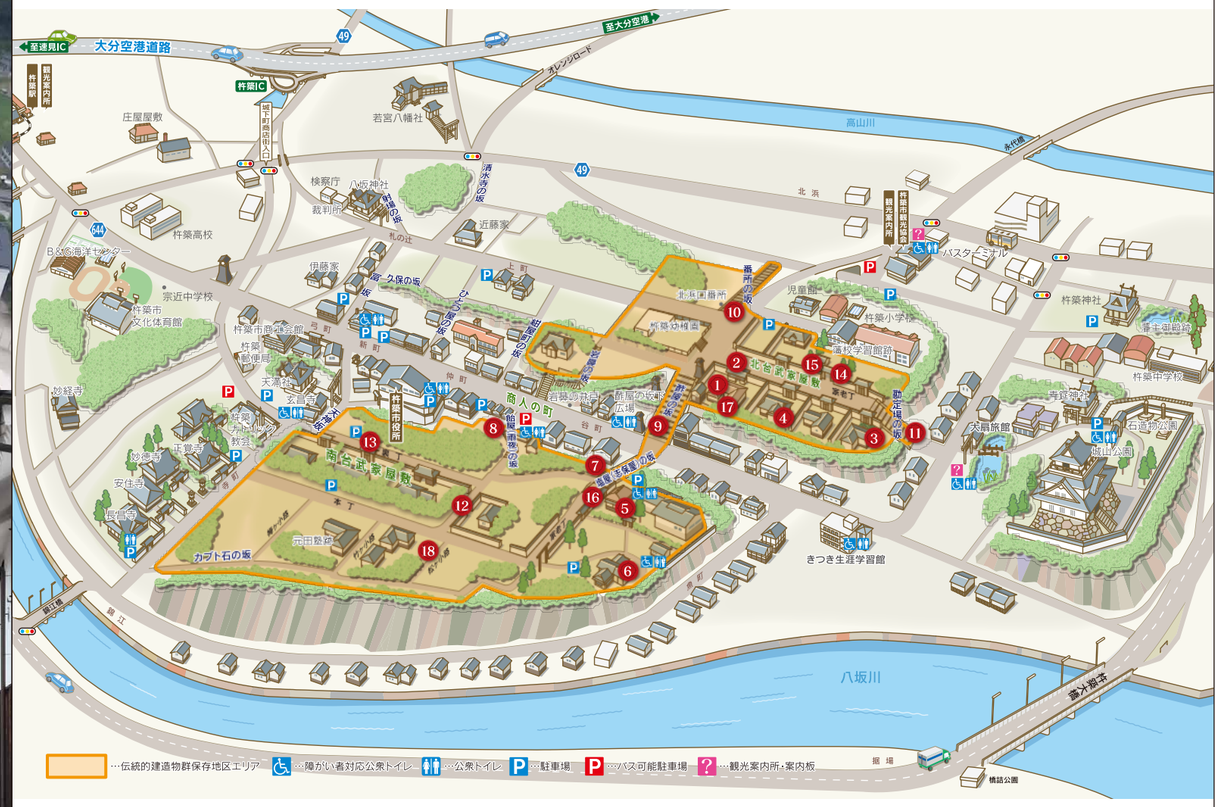
谷が分かった南北の台地に築かれた坂が特徴的な武家町

杵築市北台南台伝統的建造物群保存地区

伝統的建造物群保存地区地図



交通アクセス

マイカー	別府から／国道10号～国道213号で約30分 湯布院から／大分自動車道で（杵築IC）約30分 小倉から／東九州自動車道で約1時間20分 博多から／大分自動車道で（杵築IC）約2時間
JR	博多駅から／約2時間　小倉駅から／約1時間 ※日豊本線特急利用、杵築駅下車　※杵築駅～杵築バスターミナル　約10分

お問い合わせ

杵築市教育委員会
文化・スポーツ振興課 文化財係

〒873-0014
大分県杵築市大字本庄2005番地
TEL.0978-63-5558（代表）
FAX.0978-63-5559

http://www.city.kitsuki.lg.jp/soshiki/24/

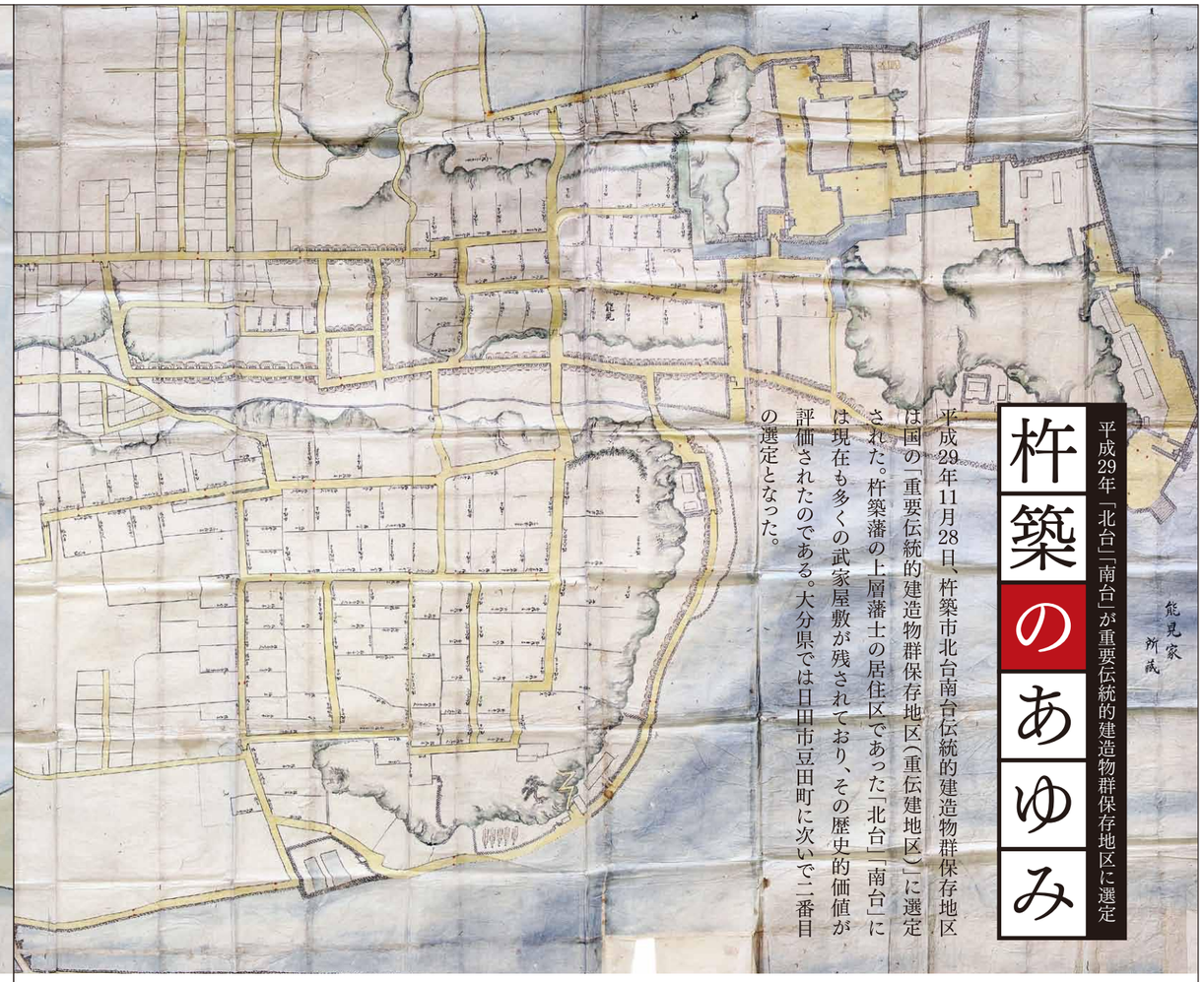
きつき　文化財係　検索

携帯電話・スマートフォンからはコチラ

杵築のあゆみ

平成29年「北台」「南台」が重要伝統的建造物群保存地区に選定

平成29年11月28日、杵築市北台南台伝統的建造物群保存地区は国の「重要伝統的建造物群保存地区（重伝建地区）」に選定された。杵築藩の上層藩士の居住区であった「北台」「南台」には現在も多くの武家屋敷が残されており、その歴史的価値が評価されたのである。大分県では日田市豆田町に次いで二番目の選定となった。



▲寸法版杵築城下絵図（能見絵図）

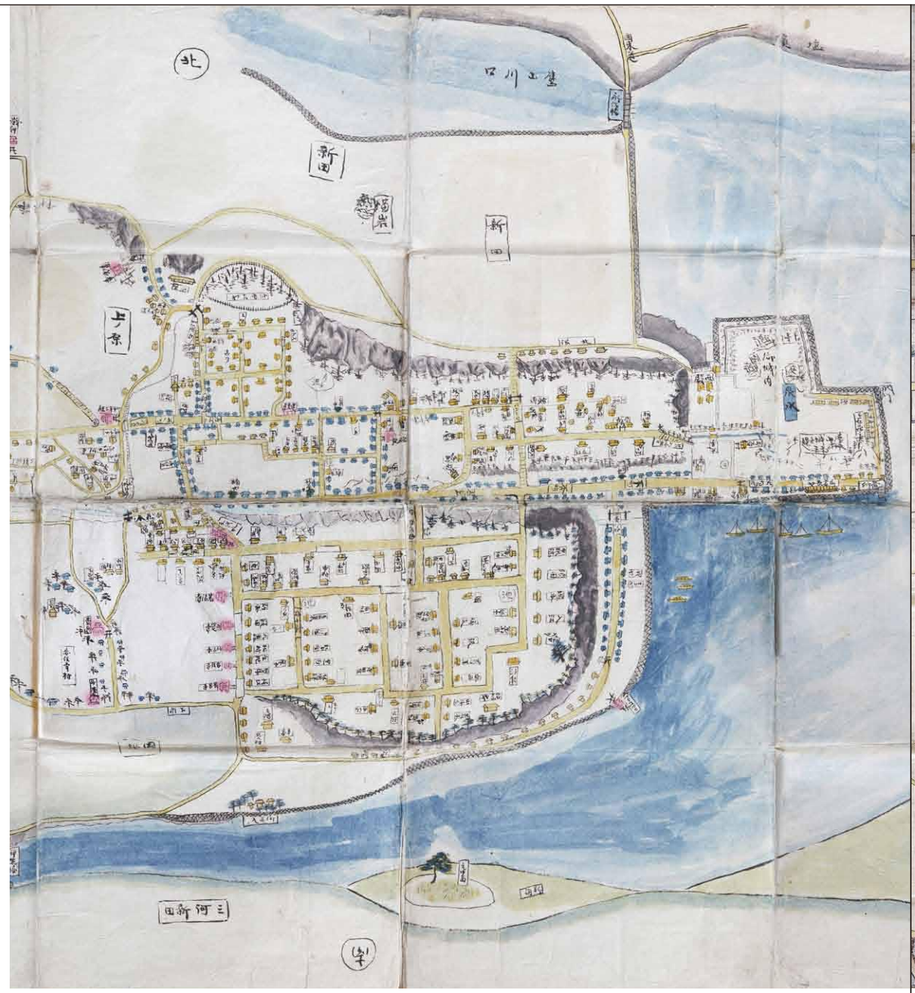
江戸

杵築市域は中世初めに大友氏の一族・木付氏が治めるようになり、その後細川氏、小笠原氏などの統治を経て、正保2年（1645）能見松平氏7代の松平英親（杵築藩初代）が入部。以後、松平杵築藩は明治維新まで10代にわたって続き、小藩ながらも譜代大名として独自の地位を与えられていた。途中正徳2年（1712）には地名の「木付」を「杵築」へと改めている。

杵築藩の経済的成長を支えたのは地域の主要産業・七島藺である。「大分県史」によれば、18世紀末期には別府湾沿岸の各藩領で年間20万束の生産があり、そのうち10万束が杵築藩地域で作られたものであったという。この豊かな経済と好学な歴代藩主の影響により、領内からは三浦梅園をはじめ多くの学者や文化人が輩出され、周辺地域には「文教の地杵築」と称されていた。

杵築城を中心として南北の高台に武家屋敷群、間の谷に商人の町が形成された特徴的な城下町は正保年間に完成したとされる。18世紀末の作成と比定される「杵築城図（金子絵図）」には、杵築城から続く勘定場の坂上「北台」、塩屋の坂上「南台」に家老以下の主立った藩士が屋敷を構えていたとある。また、幕末期に描かれたとされる南台本丁通りの絵図「南台本丁武家屋敷町筋図」にも土塀と門で囲われた武家屋敷らしい道路景観を見ることができる。

▲南台本丁武家屋敷町筋図



▲杵築藩士屋敷位置図

明治以降

明治4年の廃藩置県後、藩士たちは官吏、軍人、教師、巡査などへ転身し、そのまま家を守り続けた。しかし、中には中央で活躍するために杵築を離れた者もおり、その空き家は親族によって管理されるか、売却されるかであった。空き家の購入者は「（旧）杵築市誌」（昭和43年）によれば、元藩士の次男三男が多かったという。これは明治5年に制定された徴兵令の特典・長男徴兵免除を求めてのことで、廃家を再建する名目で養子となり長男の座を手に入れようとしたのである。一方、商家や農家では七島藺による経済成長が続き、商家の中には隠居宅として武家地を購入する者も出てきた。

こうして北台と南台には、大原邸などの武家屋敷と、近代以降の商人たちが地割を生かして建てた和風住宅の両方が見られるようになったのである。

昭和に入ると、歴史的町並みの保存とまちの活性化の調和を図っていくことがまちの発展につながるとの認識に立ち、様々な施策に取り組んできた。それは現在まで変わらず続けられている。

年表

杵築城下町に関わる出来事

建長2年（1250）
大友親重、木付に封ぜられる。（木付氏を称する）

応永元年（1394）
木付頼直（四代）台山城（木付城）に移る。

文禄2年（1593）
木付氏滅ぶ（17代344年間）豊臣秀吉の蔵入地となる。

文禄4年（1595）
前田玄以、木付城を賜る。

慶長元年（1596）
杉原長房、木付に封ぜられる。

慶長5年（1600）
細川忠興、速見・国東郡を領有（木付城代松井康之）。この頃より城下町ができはじめる。
石垣原前哨戦。木付城下攻められる。

寛永9年（1632）
小笠原忠知、木付城主になる。

正保2年（1645）
松平英親（初代）木付に転封（三万七千石、うち五千石を二弟に分地、三万二千石を領す）

天和2年（1682）
木付藩領内で七島藺の栽培が広まる。

元禄6年（1693）
貝原益軒が木付に訪れる。

元禄年間
城下町がほぼ整備される（六町十六組）

正徳2年（1712）
幕府の朱印状に「杵築」と記され、以後「木付」を「杵築」に改める。

享保10年（1726）
町屋より出火し、北台武家屋敷に飛火。火は勘定場で留まる。

宝暦13年（1763）
養徳寺より出火。南台武家屋敷や魚町が焼ける。

天明6年（1786）
三浦梅園、藩主親賢に建言「丙午封事」を提出

天明年間
松平親賢（7代）、藩校を建てる。

寛政12年（1800）
城下大火事、北台家老丁一帯が焼失。その後、瓦葺が普及する。

文化7年（1810）
伊能忠敬、測量のために杵築に訪れる。

嘉衛7年（1854）
馬場丁より出火し、多数の南台武家屋敷を焼く。

明治2年（1869）
版籍奉還、松平親貴（10代）杵築知藩事となる。

大正2年（1913）
別府～杵築間に初のバスが通る。

平成28年（2016）
北台・南台の武家地を杵築市北台南台伝統的建造物群保存地区に選定。

平成29年（2017）
杵築市北台南台伝統的建造物群保存地区を重要伝統的建造物群保存地区に選定。

重要伝統的建造物群保存地区

杵築の北台南台

～杵築藩 上層藩士の居住区～

保存地区である「北台」と「南台」に広がる武家屋敷は、近世には上層藩士の居住区であった。重臣が屋敷を構えていた北台の勘定場の坂から延びる家老丁と南台の塩屋（志保屋）の坂から延びる家老丁、南台の家老丁から西へ続く各通りなどは現在も往時の姿をよく残している。

武家屋敷は台地上の平坦な広がりに配されているので、屋敷地は地形に制約を受ける場所を除いてブロック割が施され、これを背割りにした形で割り付けられている。重臣の居住区でもあるため各屋敷の間口は広くとられ、家老など大身の屋敷地は実質的に500～600坪程度で、平均は300坪前後であった。南台の西南部において当時の敷地の細分割を経ての分譲などが見られるものの、近代以降に建てられた住宅のほとんどが江戸時代前半期（延宝～元禄頃）の屋敷地割を踏襲しており、近世の地割と景観の特色を今に伝えている。また、「杵築城図（金子絵図）」には、当時の武家居住者の姓名が記されており、それぞれの役職や知行高が確認でき、宝暦～文政初年作成の「居宅考」からは、その屋敷居住者の変遷も見て取ることができる。

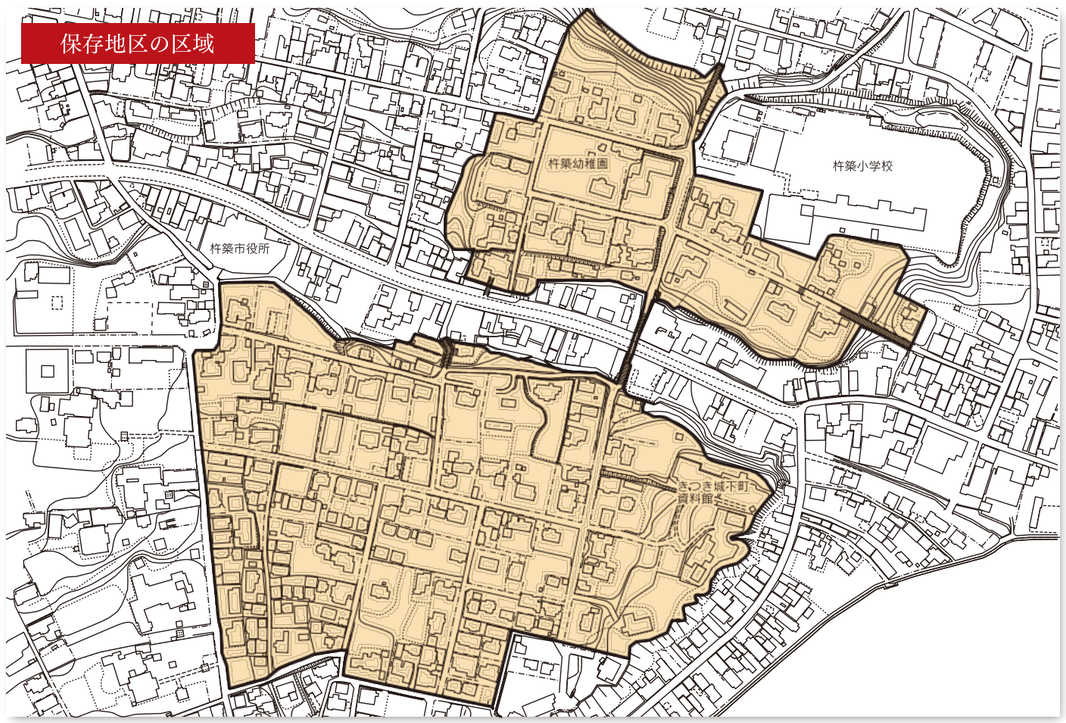
保存地区内の伝統的建造物は、18世紀以降の武家屋敷と概ね昭和30年（1955）までに建てられた和風住宅の主屋と門、離れ、土蔵などの付属屋からなる建築物と、塀、門柱、石垣、道路、通路の一部を構成する石段、石積み側溝などの工作物からなり、環境要素としては武士の居住区画であることを示す庭園、樹木、生垣、竹などがある。時代分布については江戸期のものが約4割で、明治期と思われるものが約2割、その他は大正期以降のものである。

「北台」と「南台」が全体的に良好な歴史的風致を保持しているのは、屋敷地割が300坪平均という広さを持っていたこと、主屋が道路より奥まったところに建てられていること、道路境に当時の石垣や生垣をそのまま残していることなどが大きく影響している。

保存地区の概要

- ■保存地区の名称
  杵築市北台南台伝統的建造物群保存地区
- ■面積
  約16.1ヘクタール
  保存地区の区域/杵築市大字南杵築字本丁及び字カブト石の全域並びに大字杵築字下町、字谷町、字北台、大字南杵築字梅ヶ小路、字台茶屋及び字裏丁の各一部
- ■選定年月日
  平成29年11月28日
- ■選定基準
  伝統的建造物群及び地割がよく旧態を保持している
- ■伝統的建造物
  （建築物）36件、（工作物）80件
- ■環境物件
  11件※平成29年12月現在

保存地区の区域



建築物

江戸～昭和初期まで様々な建築物が建てられている。その一部を紹介する。

北台 MAP 1 大原邸（県指定）

質素堅実、それでいて格式の高さが随所に見える家老屋敷。見事な茅葺き屋根や堂々たる長屋門が特徴で、656坪という広大な敷地の中には美しい回遊式庭園も造られている。往時の暮らし向きや風情が今も漂う貴重な建築遺産。

北台 MAP 2 長屋門（大原邸）

長屋門とは上級武士の武家屋敷で見られた門の形状の一つ。左右に家臣や使用人を住まわせる長屋がついていた。大原邸の長屋門は幅15.46m、奥行き3.64mの堂々たるもので、往時は左側に8.18mの建物が付属していたといわれる。

北台 MAP 3 磯矢邸

建築当時は「楽寿亭」と呼ばれる、藩主の休息所として設けられた御用屋敷。その後、加藤与五右衛門の屋敷となった。どの部屋からも松竹梅を眺めることができる庭など、休息所らしい"癒し"のもてなしが随所に用意されている。

北台 MAP 4 能見邸

5代藩主親盈の9男幸之丞が初代である名門・能見家の邸宅。敷地の広さやその造りに格式の高さがうかがえる。建築様式などから幕末期のものと推測。平成20年から2年にわたる大規模改修が行われ、建築当初の姿がよみがえった。

南台 MAP 5 中根邸

南台家老丁の入り口に建つ、杵築藩家老・中根氏の隠居宅。6畳と10畳の茶室、3畳ほどの茶の準備室が設けられ、職から解放された後は愛する茶の湯とともに静かな余生を過ごしたいという願いが見て取れる造りになっている。

南台 MAP 6 一松邸

国会議員として様々な大臣を歴任し、杵築市の初代名誉市民となった一松定吉氏の邸宅。杉の柾目の一枚板を用いた縁側や黒柿の床柱など贅と粋を集めた木造建築美を見ることができる。平成期に杵築城と海を望む絶景の地に移築。

工作物

工作物には薬医門、土塀のほか、
石垣や石積、石橋、門柱がある。その一部を紹介する。

坂

杵築城、
高台の武家屋敷、
谷間の商人の町。
それらをつなぐ重要な
役割を果たしていたのが「坂」である。

南台 MAP 7

塩屋の坂（志保屋の坂）

南台へ続く、杵築を代表する坂の一つ。富商・塩屋長右衛門が坂下の谷町で塩屋（酒屋）を営んでいたことからこの名がついた。塩屋の坂から振り返るように酢屋の坂を眺めると、高台と谷間を活用した城下町の形状がよくわかる。

南台 MAP 8

飴屋の坂

町家から南台裏丁へ続く、くの字型の美しい曲線を持つ坂。名の由来は、白っぽい石段が雨の夜でもよく見えたことから「雨夜の坂」と呼ばれ、それが"飴屋"に変化した説、坂下に飴屋があった説があり、両方が通説となっている。

北台 MAP 9

酢屋の坂

北台の武家屋敷と商人の町をつなぐ、土塀と石垣が印象的な杵築を代表する坂。坂下に酢屋があったことが名の由来である。塩屋の坂とは相対しており、酢屋の坂からも城下町の特徴的な形状を一望することができる。

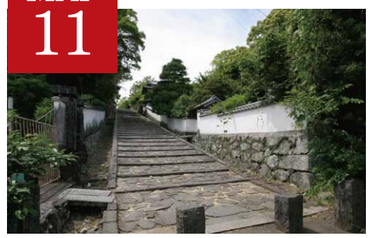
北台 MAP 10

番所の坂

江戸時代、城下町に入る道には6箇所の番所が設けられていた。その一つ、北浜口の番所に続くのがこの坂である。坂を登りつめたところにある番屋には番人が常駐し、人や物の出入りを検分。関所と同じ役割を果たしていた。

北台 MAP 11

勘定場の坂



杵築城と北台武家屋敷をむすぶこの坂の下には、江戸時代、収税や金銭出納の役所があったことから勘定場の坂と呼ばれた。石段は家老たちを運ぶ馬や駕籠担ぎの歩幅まで計算して造られたという。上から二十四段目には富士山が描かれている。

石垣・門・土塀

南台 MAP 12

石垣（通称中丁）

南台 MAP 13

石垣（田嶋家）

台地と谷を活用した町の形状から北台・南台には傾斜地が多く、これを守るためにいたるところに石垣が積まれた。石（野面石・加工石など）や積み方には時代・用途によって様々な特徴が見られ、そこからいつのものかを推察することができる。屋敷によっては、装飾性をうかがわせる独特の「鎹積み」を多用し、格式の高さを示しているところもあった。

北台 MAP 14

薬医門（藩校の門）

薬医門とは二本の本柱の背後に控え柱を立て、切妻屋根をかけた門である。「藩校の門」のように本格的なものもあるが、多くの武家屋敷では本柱と控え柱の間隔が狭い簡略形式を採用しており、扉も両引戸が通例であった。

北台 MAP 15

土塀（藩校学習館）

屋敷の周囲を仕切るもので、最も格式の高いものが土塀。北台の家老丁、南台の本丁・裏丁・家老丁・竹ヶ小路などに残っている。石垣を土台とし、高いもので6尺程度。荒壁仕上げや漆喰仕上げで塀を築き、屋根瓦を載せている。

環境物件

環境物件には庭園や、蘇鉄・松といった樹木、
生垣がある。その一部を紹介する。

南台 MAP 16

蘇鉄（中根邸）

武家屋敷では庭園の樹木とは別に、入り口である門と主屋玄関との間に玄関を隠すように蘇鉄を植えることが多かった。現在も中根邸や大原邸、磯矢邸に見ることができる。能見邸のように松を植える場合もあった。

北台 MAP 17

庭園（大原邸）

武家屋敷の庭園の多くが樹木・庭石によって構成され、池を作る例は少なかった。本格的な観賞用として造園されているのは大原邸と磯矢邸の庭園である。特に大きな池を有する大原邸の庭園は北台・南台を代表するものといえる。

南台 MAP 18

生垣（城戸家）

生垣とは生きた植物による垣根である。隣地との境界に造ることが多かった。また、屋敷の周囲を仕切り、通りに面する部分を土塀とせず生垣にした例も見られる。生垣に使われているのは多くが矢竹やマキである。